

原 著

養育里親における活動満足感と活動負担感の関連要因：横断研究

石井 陽子* トミタ サナエ*
イシイ ヨウコ* トミタ サナエ*

目的 本研究は養育里親を対象に、活動満足感および活動負担感に関連する要因を男女別に検討することを目的とした。

方法 全国66か所中、協力が得られた32か所の地域里親会に所属する養育里親2,142人を対象に調査を実施した。回答者のうち、データ欠損がなく、里子の受託経験がある者を分析対象者とした。調査内容は、基本属性、養育里親歴、実子の有無、経験した里子（年代、被虐待経験、障害の有無）、児童相談所（以下、児相）への満足度、近隣住民との付き合い、近隣への里親であることの公表、友人・里親仲間との付き合い、地区活動、地域里親会の参加状況等を尋ね、地域要因として市町村レベルの居住地人口を把握した。活動満足感および活動負担感はそれぞれ8項目と6項目の質問を作成し4件法で尋ねた。分析は、活動満足感、活動負担感の合計得点を中央値で高低2群に分けて従属変数とし、単変量解析で有意差のあった変数を独立変数として多重ロジスティック回帰分析を行った。

結果 1,052人から回答が得られ（回収率49.1%）、752人が分析対象者となった。男性247人（32.8%）、女性505人（67.2%）であった。多重ロジスティック回帰分析の結果、男性は、児相への満足度の高さと活動満足感の高さ、活動負担感の低さに有意な関連が認められた。女性は、養育里親歴が10年未満、乳児の受託経験あり、里親会参加ありが活動満足感の高さと、実子あり、障害のある里子の受託経験なし、児相への満足度の高さと、地区活動参加ありが活動負担感の低さと有意な関連が認められた。

結論 養育里親の活動満足感と活動負担感の関連要因は男女で異なっていたが、児相への満足度は男女双方の関連要因であり、里親支援において児相の役割が大きいことがあらためて示唆された。里親の活動満足感の向上や活動負担感の軽減には、児相の専門的支援や丁寧な関わりが重要である。児相や里親会による里親支援がさらに充実するには、自治体の子育て支援部門等を中心に、里親支援体制も包含した子育て世代包括ケアの在り方を検討する必要がある。

Key words : 養育里親, 活動満足感, 活動負担感, 児童相談所, 地域

日本公衆衛生雑誌 2023; 70(10): 708-717. doi:10.11236/jph.22-112

I 緒 言

日本の社会的養護を必要とする児童（以下、社会的養護下児童）は2021年時点で約42,000人おり¹⁾、子どもの権利擁護や健やかな育ちの保障にむけ、家庭的養護が推進され、その核となるのが里親制度である²⁾。社会的養護下児童では、高校卒業後の大学等への進学率の低さ^{1,3)}や雇用の不安定さ、孤独感、孤立感、人間関係の築き方の課題等³⁾があり、社会的養護終了後の自立の困難が指摘される。しかし、家庭的養護にある児童と施設養護にある児童で

はやや傾向が異なり、高校卒業後の大学等進学率では、施設養護にある児童に比べ、家庭的養護にある児童の進学率が高い¹⁾。また、措置終了後も元里親と交流を続ける里子も多く⁴⁾、家庭的養護は社会的養護下児童の孤独感や孤立感を軽減し、より安定した自立をもたらす機会といえる。2017年に公表された新しい社会的養育ビジョン²⁾では、市区町村を中心とした支援体制の構築が掲げられ、2018年には都道府県に市町村支援を含む社会的養護推進計画の策定が求められた⁵⁾。地域における包括的な里親養育支援体制の構築は重要な課題である。

里親委託される児童の約4人に1人は、発達障害や行動障害を、約4割は被虐待経験を有し¹⁾、里親のストレスや困難は大きく⁶⁻⁹⁾里親を辞める一因と

* 川崎医療福祉大学保健看護学部保健看護学科
責任著者連絡先：〒701-0193 倉敷市松島288
川崎医療福祉大学保健看護学科 石井陽子

される⁹⁾。一方、里親の幸福度や満足度は高く、里親養育を楽しんでいること⁶⁾や、人生が豊かになった¹⁰⁾報告もあり、里親は日々様々な感情を抱き里子を養育しているといえる。しかし、里親の感情について、満足感や負担感のように体系的に捉えた研究は見当たらない。里親のソーシャルサポート(以下、SS)に関する研究では、相談相手として、家族や里親仲間の他、児童相談所(以下、児相)に気持ちの通じる職員がいることがストレス軽減につながった¹¹⁾ことや、里親が地域の様々なサポートを受けていたことが報告されている¹⁰⁾。社会環境の向上を目指した地域づくりの視点にソーシャル・キャピタル(以下、SC)があり、信頼・互酬性の規範・ネットワークが構成要素とされる¹²⁾。SCは種々な事柄との関係が報告され、心の病も含めて人々の健康状態にも深く関わりとされる¹³⁾。これらより、里親の満足感や負担感にも、児相等の専門支援や、身近なSSやSCが関連するのではないかと考える。都道府県や政令市は児相の設置義務を有するが、小規模自治体は有しない等、里親が暮らす地域の実情は異なる。しかし、里親の満足感や負担感に関連する要因に言及した研究はなく、さらに個人要因に加えて、SS、SC等のソーシャル要因、地域要因を検討したものはない。現在、里親制度において4種類に区分される里親の種類で最多を占め¹⁾、家庭的養護の中心を担うのが養育里親である。さらに、里子の養育は、父親、母親としての役割や規範の影響を受ける可能性があり、男女別に関連要因を検討する必要がある。

本研究は、里子の養育を里親活動と捉え、養育里親の活動満足感および活動負担感に関連する要因を男女別に検討することを目的とした。本研究により、養育里親の活動満足感を高める、また、活動負担感を軽減するための里親支援や地域づくりの示唆が得られ、里親活動の継続や家庭的養育推進の一助になると考える。研究仮説は、養育里親の活動満足感と活動負担感には個人要因、ソーシャル要因、地域要因が関連する、および関連要因は男女で異なるとした。

II 研究方法

1. 調査および分析対象

全国66か所の地域里親会のうち、協力が得られた32か所の地域里親会に所属する養育里親2,142人を調査対象とした。里子を養育する中での活動満足感と活動負担感を明らかにするため、そのうち里子の受託経験がある者を分析対象とした。

2. 調査方法

地域里親会に、依頼文による協力依頼を行った。協力に同意する地域里親会から同意書の返送と所属する養育里親数を教えてもらった。養育里親には無記名自記式質問紙調査を実施した。養育里親宛て依頼文と質問紙票の郵送は地域里親会に依頼し、養育里親宛の個封筒を養育里親世帯数分、地域里親会に郵送した。個封筒は、依頼文、質問紙票、返信用封筒を入れ、切手を貼付した。養育里親の住所と宛名は地域里親会が記入し郵送した。調査対象の養育里親は1世帯に1人とした。調査実施にあたり、全国里親会に趣旨説明し了承を得た。調査期間は2018年12月～2019年3月であった。

3. 調査項目

1) 基本属性および個人要因

基本属性および個人要因として、性別、年齢、仕事、婚姻状態、実子の有無、養育里親歴、専門里親資格、現在の里子受託、今までに経験した里子の年代、被虐待経験、障害の有無、児相への満足度を調査した。婚姻状態は「既婚」と「既婚以外」とした。今までに経験した里子の年代は「乳児」「幼児」「小学生」「中学生」「高校生」とし、受託経験を尋ねた。被虐待経験と障害のある里子は「現在受託している」「過去に受託経験がある」「受託したことはない」を尋ね、「現在受託している」と「過去に受託したことがある」を「受託あり」、「受託したことはない」を「受託なし」とした。児相への満足度は、関係機関・サービスへの満足度として、5件法で尋ね、「満足」と「まあ満足」を「満足」、それ以外を「満足ではない」とした。

2) 個人レベルのSS・SC要因

内閣府¹⁴⁾が2003年にSCに関する調査に用いた、付きあい・交流、信頼、社会活動への参加の3要素を参考に、個人レベルのSS・SC要因(以下、個人ソーシャル要因)として、近隣住民との付き合い、近隣への里親であることの公表、友人、里親仲間との付き合い、地区活動、地域里親会の参加状況を調査した。近隣住民との付き合いは、「相談や日用品の貸し借りなど日常的な協力がある」「立ち話をする」「あいさつ程度」「付き合いはしていない」を尋ね、「相談や日用品の貸し借りなど日常的な協力がある」と「立ち話をする」を「付き合いあり」、それ以外を「付き合いなし」とした。近隣への里親であることを話しているかという質問で、「みんなに話している」「一部の人に話している」「話していない」を尋ねた。友人、里親仲間との付き合いは、「週2回以上」「月2回以上」「月1回～年2回」「年1回～

数年に1回「まったくなし」を尋ね、「週2回以上」と「月2回以上」を「付き合いあり」、それ以外を「付き合いなし」とした。地区活動は、自治会、町内会等の参加状況について、「所属して活発に参加している」「所属しているがあまり参加していない」「所属しているがまったく参加していない」「所属していない」を尋ね、「所属して活発に参加している」を「参加あり」、それ以外を「参加なし」とした。地域里親会は「よく参加する」「まあ参加する」「あまり参加しない」「まったく参加しない」を尋ね、「よく参加する」と「まあ参加する」を「参加あり」、それ以外を「参加なし」とした。

3) 地域要因

地域要因は人口を把握した。養育里親に居住地の郵便番号を記入してもらい、郵便番号から市町村を割り出し、総務省の住民基本台帳に基づく人口、人口動態および世帯数調査(2019年)¹⁵⁾の市区町村別人口から把握した。人口規模は「5万人未満」「5万人以上20万人未満」「20万人以上50万人未満」「50万人以上」の4群とした。

4) 活動満足感および活動負担感

調査項目は、村山ら¹⁶⁾が健康推進員を対象に行った活動満足感と活動負担感に関する調査項目を参考に作成した。参考理由は、健康推進員と里親では活動背景や活動内容が異なるものの、先行研究で示される里親の満足や負担の内容に合致するものが多かったためである。項目の使用許可を得て、調査者で里親活動に該当するか否かを検討し、該当と判断した場合、文言を里親活動に修正し項目を使用した。活動満足感は「里親活動は楽しい」「里親活動が好きである」「里親活動はやりがいがある」「里親としての活動内容に関心が持てる」「里親活動をこれからも継続していきたい」「里親活動を通して自分自身が成長できる」「里親活動を通して多くの人と知り合える」「里親としての経験は自分にとって有意義なものである」の8項目とした。活動負担感は「里親活動は体力的にきつい」「里親をしていると精神的に疲れてしまう」「里親としての活動内容が難しい」「里親活動は忙しい」「里親活動のために、家事、買い物、仕事などに支障がある」「里親活動のために、趣味や他の活動をする時間がない」の6項目とした。回答は「そう思う」(3点)から「そう思わない」(0点)の4件法で尋ねた。

4. 倫理的配慮

川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号18-048, 2018年7月30日承認)。地域里親会と養育里親には調査目的、参加の任意性、個人情報取扱いを説明した。郵便番号は使用目的を

居住地域の市町村人口の把握に限定することを記した。養育里親への質問紙等の郵送は、地域里親会に依頼し、養育里親から同意欄を記入した質問紙票を直接調査者へ返送してもらった。

5. 分析方法

初めに記述統計で分析対象者の傾向をみた。次に、活動満足感および活動負担感の合計得点を従属変数として使用するにあたり、独自の作成項目のため、3次因子分析モデルを作成し、確証的因子分析にてモデルとデータ適合度を確認した。活動満足感の3次因子分析モデルは、「活動満足感」を3次因子、「活動愛着」と「自己利益」を2次因子、「活動愛着」の1次因子を「里親活動は楽しい」「里親活動が好きである」「里親活動はやりがいがある」「里親としての活動内容に関心が持てる」「里親活動をこれからも継続していきたい」とし、「自己利益」の1次因子を「里親活動を通して自分自身が成長できる」「里親活動を通して多くの人と知り合える」「里親としての経験は自分にとって有意義なものである」とした。活動負担感の3次因子分析モデルは、「活動負担感」を3次因子、「身体・精神負担」と「時間的制約」を2次因子、「身体・精神負担」の1次因子を「里親活動は体力的にきつい」「里親をしていると精神的に疲れてしまう」「里親としての活動内容が難しい」とし、「時間的制約」の1次因子を「里親活動は忙しい」「里親活動のために、家事、買い物、仕事などに支障がある」「里親活動のために、趣味や他の活動をする時間がない」とした。適合度は、WLSMV法を用い、 χ^2 値、RMSEA、CFI、SRMRを確認した。また、活動満足感と活動負担感の合計得点は正規性がなかったため、中央値で高低2群に分け従属変数とした。各変数と活動満足感、活動負担感の高低の関係について、 χ^2 検定にて関連要因を検討し、有意差のあった変数を独立変数とした。さらに、活動満足感および活動負担感の独立関連要因を検討するため、これら従属変数と独立変数を用いて多重ロジスティック回帰分析を行った。多重ロジスティック回帰分析は、調整変数を年齢とし、強制投入法を実施した。分析はIBM SPSS ver.22およびMplus8.2を用い、統計学的有意水準は5%未満(両側検定)とした。

III 研究結果

1. 回収状況と分析対象者

2,142人中1,052人から回答を得た(回収率49.1%)。データ欠損がなく、里子の受託経験がある752人を分析対象とした。

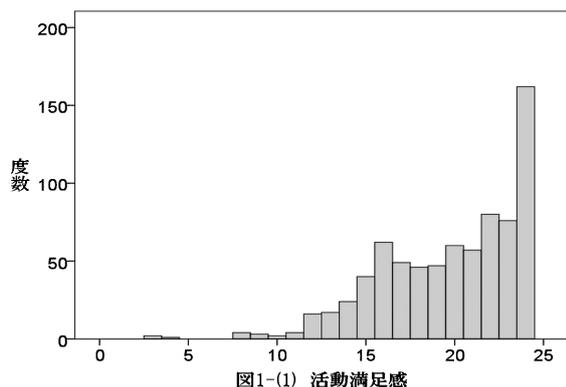
表1 対象者の基本属性および関連要因

| | | 全 体 | | 男性 <i>n</i> = 247 | | 女性 <i>n</i> = 505 | | P 値 |
|----------------|--------------|-------------|------|-------------------|------|-------------------|------|-------|
| | | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | |
| 個人要因 | | | | | | | | |
| 年齢 | | 55.41(±9.8) | | 56.85(±10.5) | | 54.7(±9.4) | | 0.000 |
| 30-39歳 | | 30 | 4.0 | 13 | 5.3 | 17 | 3.4 | |
| 40-59歳 | | 452 | 60.1 | 122 | 49.4 | 330 | 65.3 | |
| 60歳以上 | | 270 | 35.9 | 112 | 45.3 | 158 | 31.3 | |
| 仕事 | 有 | 498 | 66.2 | 215 | 87.0 | 283 | 56.0 | 0.000 |
| | 無 | 254 | 33.8 | 32 | 13.0 | 222 | 44.0 | |
| 婚姻 | 有 | 711 | 94.5 | 239 | 96.8 | 472 | 93.5 | 0.086 |
| | 無 | 41 | 5.5 | 8 | 3.2 | 33 | 6.5 | |
| 実子 | 有 | 404 | 53.7 | 130 | 52.6 | 274 | 54.3 | 0.697 |
| | 無 | 348 | 46.3 | 117 | 47.4 | 231 | 45.7 | |
| 養育里親歴 | | 11.13±8.7 | | 11.44(±9.4) | | 10.98(±8.3) | | 0.301 |
| 5年未満 | | 182 | 24.2 | 60 | 24.3 | 122 | 24.2 | |
| 5~9年 | | 221 | 29.4 | 76 | 30.8 | 145 | 28.7 | |
| 10~19年 | | 237 | 31.5 | 68 | 27.5 | 169 | 33.5 | |
| 20年以上 | | 112 | 14.9 | 43 | 17.4 | 69 | 13.7 | |
| 専門里親資格 | 有 | 168 | 22.3 | 52 | 21.1 | 116 | 23.0 | 0.577 |
| | 無 | 584 | 77.7 | 195 | 78.9 | 389 | 77.0 | |
| 現在の里子受託 | 有 | 544 | 72.3 | 171 | 69.2 | 373 | 73.9 | 0.193 |
| | 無 | 208 | 27.7 | 76 | 30.8 | 132 | 26.1 | |
| 経験した里子 | | | | | | | | |
| 乳児 | 有 | 224 | 29.8 | 60 | 24.3 | 164 | 32.5 | 0.022 |
| | 無 | 528 | 70.2 | 187 | 75.7 | 341 | 67.5 | |
| 幼児 | 有 | 525 | 69.8 | 175 | 70.9 | 350 | 69.3 | 0.735 |
| | 無 | 227 | 30.2 | 72 | 29.1 | 155 | 30.7 | |
| 小学生 | 有 | 455 | 60.5 | 152 | 61.5 | 303 | 60.0 | 0.692 |
| | 無 | 297 | 39.5 | 95 | 38.5 | 202 | 40.0 | |
| 中学生 | 有 | 280 | 37.2 | 99 | 40.1 | 181 | 35.8 | 0.262 |
| | 無 | 472 | 62.8 | 148 | 59.9 | 324 | 64.2 | |
| 高校生 | 有 | 239 | 31.8 | 84 | 34.0 | 155 | 30.7 | 0.360 |
| | 無 | 513 | 68.2 | 163 | 66.0 | 350 | 69.3 | |
| 被虐待経験 | 有 | 227 | 30.2 | 69 | 27.9 | 158 | 31.3 | 0.354 |
| | 無 | 525 | 69.8 | 178 | 72.1 | 347 | 68.7 | |
| 障害 | 有 | 302 | 40.2 | 93 | 37.7 | 209 | 41.4 | 0.343 |
| | 無 | 450 | 59.8 | 154 | 62.3 | 296 | 58.6 | |
| 児相への満足度 | 満足 | 506 | 67.3 | 165 | 66.8 | 341 | 67.5 | 0.869 |
| | 満足ではない | 246 | 32.7 | 82 | 33.2 | 164 | 32.5 | |
| 個人ソーシャル要因 | | | | | | | | |
| 近隣付き合い | 有 | 210 | 27.9 | 62 | 25.1 | 148 | 29.3 | 0.261 |
| | 無 | 542 | 72.1 | 185 | 74.9 | 357 | 70.7 | |
| 近隣への里親であることの公表 | | | | | | | | |
| みんなに話した | | 315 | 41.9 | 104 | 42.1 | 211 | 41.8 | 0.606 |
| 一部に話した | | 354 | 47.1 | 112 | 45.3 | 242 | 47.9 | |
| 話していない | | 83 | 11.0 | 31 | 12.6 | 52 | 10.3 | |
| 友人付き合い | 有 | 397 | 52.8 | 120 | 48.6 | 277 | 54.9 | 0.120 |
| | 無 | 355 | 47.2 | 127 | 51.4 | 228 | 45.1 | |
| 里親付き合い | 有 | 125 | 16.6 | 34 | 13.8 | 91 | 18.0 | 0.146 |
| | 無 | 627 | 83.4 | 213 | 86.2 | 414 | 82.0 | |
| 地区活動参加 | 有 | 357 | 47.5 | 135 | 54.7 | 222 | 44.0 | 0.006 |
| | 無 | 395 | 52.5 | 112 | 45.3 | 283 | 56.0 | |
| 里親会参加 | 有 | 484 | 64.4 | 155 | 62.8 | 329 | 65.1 | 0.518 |
| | 無 | 268 | 35.6 | 92 | 37.2 | 176 | 34.9 | |
| 地域要因 | | | | | | | | |
| 人口 | 5万人未満 | 188 | 25.0 | 64 | 25.9 | 124 | 24.6 | 0.530 |
| | 5万人以上20万人未満 | 211 | 28.1 | 65 | 26.3 | 146 | 28.9 | |
| | 20万人以上50万人未満 | 110 | 14.6 | 42 | 17.0 | 68 | 13.5 | |
| | 50万人以上 | 243 | 32.3 | 76 | 30.8 | 167 | 33.1 | |

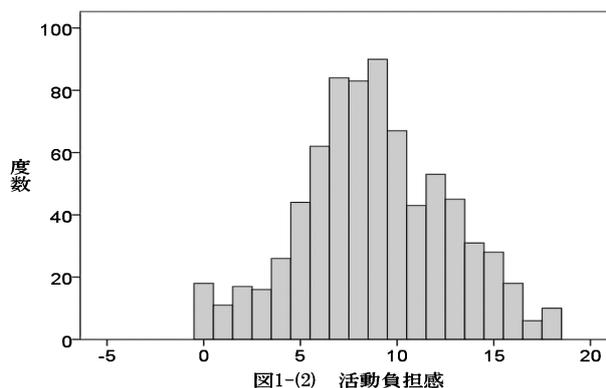
年齢, 養育里親歴の上段は Mean (±SD) を示す

年齢, 養育里親歴は *t* 検定, その他の変数は χ^2 検定を用いた

図1 活動満足感および活動負担感の合計得点分布



活動満足感8項目 0点-24点
 平均値 (±SD) 19.709 (±3.874)
 中央値 20
 Shapiro-Wilk検定 $P=0.000$



活動負担感6項目 0点-18点
 平均値 (±SD) 8.829 (±3.857)
 中央値 9
 Shapiro-Wilk検定 $P=0.000$

2. 分析対象者の基本属性および関連要因

分析対象者の基本属性および関連要因を表1に示す。男性が247人(32.8%)、女性が505人(67.2%)であった。男女で有意差がみられたのは、年齢、仕事、乳児の受託経験、地区活動参加の4つで、男性の平均年齢、仕事有、地区活動参加有の割合が高かった。

3. 活動満足感および活動負担感の項目について

合計得点分布を図1に示す。合計得点はそれぞれ正規性検定で統計学的な有意差を認めため、中央値(活動満足感:20点以上,20点未満;活動負担感:9点以上,9点未満)とした。3次因子分析モデルを確証的因子分析にてモデルとデータ適合度を確認した結果、活動満足感は χ^2 値=156.294, $df=19$, RMSEA=0.098, CFI=0.988, SRMR=0.028, 活動負担感 χ^2 値=34.890, $df=8$, RMSEA=0.067, CFI=0.997, SRMR=0.020であった。これらは概ね適合度の基準内であり、養育里親の活動満足感と活動負担感を測定していると判断した。

4. 養育里親の活動満足感・活動負担感に関連する要因

単変量解析結果を表2に、多重ロジスティック回帰分析結果を表3に示す。

1) 活動満足感に関連する要因

男性は、単変量解析および多重ロジスティック回帰分析を行った結果、最終的に児相への満足度が関連要因であった(オッズ比1.854, 95%信頼区間1.042-3.296)。女性は、単変量解析および多重ロジスティック回帰分析を行った結果、最終的に養育里親歴の10~19年(オッズ比0.352, 95%信頼区間0.211-0.589)と20年以上(オッズ比0.329, 95%信

頼区間0.173-0.625)、乳児の受託経験(オッズ比1.695, 95%信頼区間1.127-2.548)、里親会参加(オッズ比2.005, 95%信頼区間1.349-2.980)が関連要因であった。

2) 活動負担感に関連する要因

男性は、単変量解析および多重ロジスティック回帰分析を行った結果、最終的に児相への満足度が関連要因であった(オッズ比0.558, 95%信頼区間0.324-0.960)。女性は、単変量解析および多重ロジスティック回帰分析の結果、実子の有無(オッズ比0.609, 95%信頼区間0.421-0.879)、経験した里子の障害(オッズ比1.782, 95%信頼区間1.226-2.590)、児相への満足度(オッズ比0.556, 95%信頼区間0.377-0.819)、地区活動参加(オッズ比0.642, 95%信頼区間0.446-0.923)が、関連要因であった。

IV 考 察

養育里親の活動満足感の高さに有意な関連要因は、男性では、児相への満足度の高さ、女性は、養育里親歴が10年未満、乳児の受託経験あり、里親会参加ありであった。また、活動負担感の低さに有意な関連要因は、男性では、児相への満足度の高さ、女性は、実子あり、障害のある里子の受託経験なし、児相への満足度の高さ、地区活動参加ありであった。

男性では、児相への満足度の高さが活動満足感の高さと活動負担感の低さへの唯一の関連要因であった。里親のアンケートでは、里母の回答が多く⁶⁾、本研究も同様であった。なかでも回答した本研究参加の男性は、里親制度に関心が高いと考える。男性は職場のネットワークを持ち、仕事として話をすることが多い¹⁷⁾。児相を里親支援の一組織と捉え、父

表3 活動満足感および活動負担感に関連する要因のロジスティック回帰分析結果 $n=752$

| | 男 性 $n=247$ | オッズ比 | 95% 信頼区間 | | P 値 |
|----------------|----------------|-----------|-------------|-------|-------|
| | | | 下限 | 上限 | |
| 活動満足感 | | | | | |
| 現在の里子受託 | 無 | Reference | | | |
| | 有 | 1.641 | 0.886 | 3.038 | 0.115 |
| 児相への満足度 | 満足ではない | Reference | | | |
| | 満足 | 1.854 | 1.042 | 3.296 | 0.036 |
| 近隣付き合い | 無 | Reference | | | |
| | 有 | 1.29 | 0.64 | 2.560 | 0.484 |
| 近隣への里親であることの公表 | 話していない | Reference | | | |
| | 一部に話した | 0.883 | 0.364 | 2.143 | 0.783 |
| | みんなに話した | 2.26 | 0.868 | 5.884 | 0.095 |
| 友人付き合い | 無 | Reference | | | |
| | 有 | 1.707 | 0.967 | 3.015 | 0.065 |
| 地区活動参加 | 無 | Reference | | | |
| | 有 | 1.159 | 0.643 | 2.087 | 0.624 |
| 活動負担感 | | | | | |
| 障害 | 無 | Reference | | | |
| | 有 | 1.656 | 0.979 | 2.801 | 0.060 |
| 児相への満足度 | 満足ではない | Reference | | | |
| | 満足 | 0.558 | 0.324 | 0.960 | 0.035 |
| | 女 性 $n=505$ | オッズ比 | 95% 信頼区間 | | P 値 |
| 活動満足感 | | | | | |
| 養育里親歴 | | Reference | | | |
| | 5年未満 | 0.756 | 0.444 | 1.285 | 0.301 |
| | 5~9年 | 0.352 | 0.211 | 0.589 | 0.000 |
| | 10~19年 | 0.329 | 0.173 | 0.625 | 0.001 |
| | 20年以上 | | | | |
| 経験した里子 | | | | | |
| | 乳児 | Reference | | | |
| | 無 | 1.695 | 1.127 | 2.548 | 0.011 |
| | 有 | | | | |
| 近隣付き合い | 無 | Reference | | | |
| | 有 | 1.265 | 0.813 | 1.968 | 0.297 |
| 近隣への里親であることの公表 | 話していない | Reference | | | |
| | 一部に話した | 1.142 | 0.605 | 2.155 | 0.682 |
| | みんなに話した | 1.658 | 0.845 | 3.253 | 0.142 |
| 里親会参加 | 無 | Reference | | | |
| | 有 | 2.005 | 1.349 | 2.980 | 0.001 |
| 活動負担感 | | | | | |
| 実子 | 無 | Reference | | | |
| | 有 | 0.609 | 0.421 | 0.879 | 0.008 |
| 経験した里子 | | | | | |
| | 障害 | Reference | | | |
| | 無 | 1.782 | 1.226 | 2.590 | 0.002 |
| | 有 | | | | |
| 児相への満足度 | 満足ではない | Reference | | | |
| | 満足 | 0.556 | 0.377 | 0.819 | 0.003 |
| 地区活動参加 | 無 | Reference | | | |
| | 有 | 0.642 | 0.446 | 0.923 | 0.017 |

調整変数を年齢とした
 活動満足感は合計得点を中央値で高群（20点-24点）と低群（3点-19点）の2群に区分した
 活動負担感に合計得点を中央値で高群（9点-18点）と低群（0点-8点）の2群に区分した
 モデル χ^2 検定: $P=0.000$

や夫の役割から気づいた意見を伝える等積極的に関わり、その活動への児相の対応や関係性が活動満足感や負担感に関連するのではないかと考える。里親が大変な時期に支えになった存在では、同居家族の次に児相職員が挙げられ¹⁸⁾、里親から児相への相談内容は、里子の行動上の問題や障害に関することが多く、職員の丁寧な関わりや専門的な助言や支援に対する里親の満足は高い¹⁹⁾。相談体制の構築や透明性のある情報提供等、里親と児相の信頼関係の重要性も示されている^{20,21)}。男性里親にとって児相の存在はとくに大きいといえる。

女性では、養育里親歴が10年未満、乳児の受託経験あり、里親会参加ありが活動満足感の高さと関連していた。里親歴が長い里親は、里親会でベテラン里親として助言者になることが多く¹⁹⁾、児相から対応困難な里子の受託を相談されることもある。一方、ベテランは責任が重く、相談できる支援協力体制が必要とされる²²⁾。ベテラン里親が重圧なくその力を発揮できることが活動満足感の向上につながり、そのような支援体制が重要と考える。また、里親になった動機で児童福祉への理解に次いで多いのが、子どもを育てたいである²³⁾。里親委託される里子の年齢は0歳が最も多い⁶⁾。子どもを育てたいと里親になり、里母として乳児期の里子を育てることが活動満足感の高まりにつながると考える。里親会の中心は研修会や親睦会で²⁴⁾、里親が里親会に参加する目的は、里親同士の情報共有や共感ニーズを満たすためが多い¹⁹⁾。加えて、里親会参加により児相職員との関係が深まることも指摘される²⁴⁾。女性はパーソナル・ネットワークにおいて悩みを相談し、実用面で助け合う等、情緒的、実用的なサポート機能を果たす¹⁷⁾。里親会参加により、学習や情報交換のみならず、サポート機能が授受できることから、女性の活動満足感の高さにつながると考える。しかし、里親会に関しては、体制や運営、活動の地域差が大きく課題も指摘される^{24~26)}。里親会が里親支援を効果的に遂行するには、里親会のみで解決困難な課題も多いことから、自治体の子育て支援部門等を中心に、里親支援体制も包含した子育て世代包括ケアの在り方を検討し、官民共働体制を整え、里親会を位置付ける等の工夫も必要ではないかと考える。

また、女性では、実子あり、障害のある里子の受託経験なし、児相への満足度の高さ、地区活動参加ありと活動負担感の低さに関連が認められた。里親であることの実子への影響は、長所と短所の両面が指摘される²⁷⁾が、本研究結果は、実子の存在が里親の活動負担感を軽減することを示した。実子が親のサポートや里子に対してきょうだいの役割を担う²⁷⁾

ためと考える。実子も含め家族全体で里子を養育できるように、家族支援の視点が欠かせない。本研究の分析対象者の約4割が障害のある里子の受託経験があり、先行調査結果⁶⁾とはほぼ合致した。先述のとおり、児相への相談内容は里子の問題行動や障害に関することが多い。障害のある里子の養育は簡単ではなく、とくに里母として日常的に育児に携わる女性の活動負担感に関連すると考える。加えて述べるならば、有意差はなかったものの、男性においても活動負担感へのオッズ比が1.656であったことから、障害のある里子の受託では、児相の専門支援が一層重要と考える。女性においても児相への満足度が高いほど活動負担感が軽減されることから、里親にとって児相が重要な支援機関であることが改めて示唆されたといえる。また、女性は子育てのなかで地域活動に参入し、子育て時の仲間を中心に近隣に顔見知りをつくり、社会的支援や手段的援助を受けるとされる¹⁷⁾。女性の地区活動参加の背景にはこのような子育て仲間との交流があり、活動負担感の低さに関連すると考える。

本研究の限界と課題を述べる。観察的横断研究であり、関連要因の因果関係は解明できていない。地域要因は居住自治体の人口規模を把握するに留まり、かつ有意差はみられなかったため、地域づくりの示唆を得るには課題が残った。また、児相への満足度の質問は具体性に欠けており、障害のある里子の受託経験は、調査時に障害を明示していないことから、回答者の捉え方により回答が異なる可能性がある。活動満足感と活動負担感に関して、健康推進員活動に関する先行研究¹⁶⁾を参考に項目作成し、データ適合度は基準内であり、その理由は健康推進員活動の項目が活動全般を捉えたものであるためと考えられたが、十分な検証はできていない。さらに、尺度としての検証は、内容的妥当性と構造的妥当性に留まり、信頼性は検証していない。今後は、地域要因を再検証し、地域づくりの示唆を得ることが課題である。

V 結 語

男女で活動満足感と活動負担感の関連要因は異なる中、児相への満足度は男女双方の関連要因であり、里親にとって児相の役割が大きいことが改めて示唆された。里親の活動満足感の向上や活動負担感の軽減には、児相の専門的支援や丁寧な関わりが重要であり、児相や里親会による里親支援がさらに充実するには、自治体の子育て支援部門等を中心に、里親支援体制も包含した子育て世代包括ケアの在り方を検討する必要がある。

本研究の実施にあたり、ご協力いただきました地域里親会および養育里親の皆様には深謝申し上げます。また、研究を見守っていただきました全国里親会に感謝いたします。本研究は平成28～30年度科学研究費補助金（JSPS JP16K16002）を受けて実施した研究である。本研究における開示すべきCOIはない。

| | | |
|---|-------------|------------|
| （ | 受付 | 2022.11.22 |
| | 採用 | 2023. 4.26 |
| | J-STAGE早期公開 | 2023. 6.28 |

文 献

- 1) 厚生労働省. 社会的養育の推進に向けて. 2022. <https://www.mhlw.go.jp/content/000833294.pdf> (2022年8月9日アクセス可能).
- 2) 厚生労働省. 新しい社会的養育ビジョン. 2017. <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000173888.pdf> (2022年8月9日アクセス可能).
- 3) 武藤素明. 社会的養護の下を巣立った子どもたちの自立. 武藤素明編. 施設・里親から巣立った子どもたちの自立. 東京: 福村出版. 2012; 8-41.
- 4) 青葉紘宇. 里親養育における自立支援を考えるにあたって—実態調査を通じて気づかされたこと. 武藤素明編. 施設・里親から巣立った子どもたちの自立. 東京: 福村出版. 2012; 148-175.
- 5) 厚生労働省. 「都道府県社会的養育推進計画」の策定について. 2018. <https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000349815.pdf> (2022年8月9日アクセス可能).
- 6) 伊藤嘉余子 (事業担当者). 里親家庭における養育実態と支援ニーズに関する調査研究事業. 2018. <https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000520434.pdf> (2022年8月9日アクセス可能).
- 7) 深谷和子. 里親による里子「療育」の日々と里子(被虐待児)の心的世界—平成24年養育家庭全国アンケート調査から—. 福祉心理学研究 2014; 11: 7-14.
- 8) Lohaus A, Chodura S, Moller C, et al. Children's mental health problems and their relation to parental stress in foster mothers and fathers. *Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health* 2017; 11, 43.
- 9) 家族として生活することの意義についての一考察—里子と親子関係を築けなかった経験を持つ里母の語りから—. 文京学院大学人間学部研究紀要 2008; 10: 49-68.
- 10) 中村美恵. 専門里親になること—職業としての里親を選んだ心理プロセスに焦点を当てて—. 臨床心理学研究 2016; 14: 59-75.
- 11) 奈良隆正, 阿部好恵, 鈴木幸雄. 里親のソーシャルサポートと情緒的疲弊に関する実証的研究. 帯広大谷短期大学紀要 2011; 48: 47-54.
- 12) 稲葉陽二. ソーシャル・キャピタルの多面性と可能性. 稲葉陽二編. ソーシャル・キャピタルの潜在力. 東京: 日本評論社. 2008; 11-22.
- 13) 稲葉陽二. ソーシャル・キャピタルの重要性. 稲葉

- 陽二編. ソーシャル・キャピタルの潜在力. 東京: 日本評論社. 2008; 184-191.
- 14) 内閣府国民生活局. 平成14年度 ソーシャル・キャピタル: 豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて. 2003.
https://www.npo-homepage.go.jp/uploads/report_h14_sc_gaiyou.pdf (2022年8月9日アクセス可能).
- 15) 総務省. 住民基本台帳に基づく人口, 人口動態及び世帯数調査. 2019.
https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200241&tstat=000001039591&cycle=7&year=20190&month=0&tclass1=000001039601&result_back=1&tclass2val=0 (2022年8月9日アクセス可能).
- 16) 村山洋史, 田口敦子, 村嶋幸代. 健康推進員活動における活動満足感, 活動負担感の尺度開発. 日本公衆衛生雑誌 2006; 53: 875-883.
- 17) 小山弘美. 第5章 地域参加を促進するには. 稲葉陽二編. ソーシャル・キャピタルからみた人間関係—社会関係資本の光と影. 東京: 日本評論社. 2021; 82-102.
- 18) 全国里親委託等推進委員会. 里親家庭の全国実態調査報告. 平成27年度調査報告書. 東京: 全国里親委託等推進委員会事務局. 2016; 2-12.
- 19) 伊藤嘉余子. 里親の支援ニーズと支援機関の役割—里親アンケート調査結果からの考察. 社会福祉学 2016; 57: 30-41.
- 20) 佐藤隆司. 児童相談所による里親支援—里親支援の基本は児童相談所との信頼関係—. 世界の児童と母性 2010; 69: 70-73.
- 21) Tracy EM, Susan R, Anne LC, et al. The needs of foster parents: a qualitative study of motivation, support, and retention. Qualitative Social Work 2006; 5: 351-368.
- 22) 白石京子. 経験年数別に見た保育者のストレス反応軽減に有効な支援の考察—ストレス反応とストレスサー, ソーシャルサポート, コーピングの関係—. 生活科学研究 2019; 41: 17-24.
- 23) 厚生労働省. 平成29年度児童養護施設入所児童等調査. 2017. <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00450273&tstat=000001024520&cycle=8&tclass1=000001137628&tclass2val=0> (2023年3月9日アクセス可能).
- 24) 木ノ内博道. 地域里親会の現状と課題. 里親と子ども編集委員会. 里親と子ども Vol. 4. 東京: 明石書店. 2009; 7-12.
- 25) 有村大士, 木ノ内博道, 庄司順一, 他. 地域の里親会活動の現状—調査結果から見えてくること. 里親と子ども編集委員会. 里親と子ども, Vol. 4. 東京: 明石書店. 2009; 22-25.
- 26) 石井陽子, 富田早苗, 波川京子. 地域里親会の現状と課題—地域里親会と養育里親の調査から—. 川崎医療福祉学会誌 2021; 30: 589-596.
- 27) 山本真知子. 里親家庭における実子への支援の現状と課題. 社会福祉研究 2019; 135: 15-23.
-

Factors related to activity satisfaction and activity burden in foster parents: A cross-sectional study

Yoko ISHII* and Sanae TOMITA*

Key words : foster parents, satisfaction, burden, child guidance center, community

Objectives This study aimed to identify the relevant factors related to activity satisfaction (AS) and activity burden (AB) in foster parents on the basis of sex.

Methods A survey was conducted among 2,142 foster parents from 32 local foster parent associations. The inclusion criterion was survey respondents who had experience in raising foster children. The demographics, individual factors, and social support/capital factors were measured individually. The residential populations were examined at the municipal level. Based on previous studies, questions related to AS and AB were created using a four-item method. We performed multiple logistic regression analyses. The parents were divided into two groups based on the median total scores of AS and AB, identified as dependent variables.

Results A total of 1,052 parents responded to the survey (response rate, 49.1%), of whom 752 had no data deficiencies and had experience in fostering children; thus, they were included in the analysis, and were divided by sex into male ($n=247$, 32.8%) and female ($n=505$, 67.2%) groups. Among the men, multiple logistic regression analysis revealed that satisfaction with the child guidance center (CGC) was a significant factor related to AS and AB. Among the women, < 10 years of experience as a foster parent, experience in caring for an infant, and participation in foster parent meetings were significant factors related to AS. Having a biological child, experience of fostering children with disabilities, satisfaction with the CGC, and participation in community activities were significant factors related to AB.

Conclusion Although factors related to AS and AB differed between men and women, satisfaction with the CGC was an important factor for both groups. This suggests that the CGC plays a crucial role in supporting foster parents. We believe that it is essential for the CGC to provide specialized support to foster parents and maintain close relationships with them.

* Department of Nursing, Faculty of Nursing, Kawasaki University of Medical Welfare